

書評と紹介

した氏の所説もまた不確実である。つまり、この箇所は事実認定になっていないのである。およそ千二百年の時間の隔たりを、何らの検証を経ない推測によって直結することが、いかに危険な行為であるかは贅言を要さない。歴史研究者が本書で多用される「基層」という用語の使用に慎重なのは、その語が安易に遙かな過去と現在を直結してしまう危険性をはらんでいるからである。民俗学に対する批判はしばしばこの点においてなされるのであるが、「歴史民俗学」を標榜する著者がかかる見解を採ることは残念である。

序でに述べておくと、著者の事実認定は全編を通して曖昧な箇所が目立つ。本書では「可能性がある」、「ではないかと考えられる」、「と思われる」、「恐らくは」という推測表現が目立ち、その推測の上に「論」が組み立てられていることがしばしば見受けられた。かかる「論拠」の上に立った「論」は、いわば砂上の楼閣に過ぎない。評者がこれまで本書の意義を認めた点においてもこの傾向は見られ、残念ながら示唆や方向性の指摘という点において意義を認めるに止めざるを得ない箇所もある。本書の指摘や示唆が魅力的であるだけに、事実認定の方法には今少し配慮がほしかったと残念である。

最後に、些末なことだが、違和感を覚える語がいくつか見られた。例えば、山口県の「山陰側」（一五頁ほか）とあるが、防長二国はともに山陽道に属する。二八三頁には「先に脚注であげた（中略）習俗」とあるが、全編を通して脚注は一つも付されていない。また、これは本を制作する側の問題かもしれないが、「禄上」↓「録上」（一七頁）、「史料三典」↓「史料三

点」（四四頁）など誤字と思われるものも目立った。

井上治代著

『墓と家族の変容』

岩波書店 二〇〇三年二月二〇日刊

A5判 二八一頁 四二〇〇円

孝 本 頁

一九九〇年代以降先祖祭祀、葬儀、墓をめぐる様々なレベルからの議論が盛んになってきた。それは「お墓革命」と称されるように、既存の枠組みでは捉えきれない墓をめぐる様々な状況が出現してきたことの帰結である。しかし、その変化の内実は充分には解明されてきたとは云えない。しかも、伝統的宗教基盤の大きな揺らぎ、さらには日本社会の基盤的側面での価値変動を伴うものであるがゆえに、よほどの研究蓄積が必要であることはいうまでもない。こうした状況の中で今日的課題を真正面から追求した本書が刊行されたことは、これらの研究の深化のために画期的な一步を提示したものだといえよう。

本書の目次は以下の構成になっている。

本書の研究課題を纏めた第I章 序論、新潟県巻町・妙光寺檀家調査に基づく第II章、直系家族制地域の家族と墓の変化を

過疎地帯である鹿児島県大浦町の調査に基づいて分析した第III章、都市家族の墓をめぐる祭の実態を、都市公園墓地において墓碑に夫方、妻方の氏を刻んでいる「双方」墓の調査、さらに都市家族の意識調査を分析した第IV章、家族の変化と墓での祭祀の双方化、夫婦別墓、墓の新たな展開としての非継承墓の出現などを取り扱った第V章、家族の個人化と脱家現象を纏めた結論のVI章で構成されている。

目次構成から了解されるように、今日の状況を網羅的に取り組もうとしている著者の目論みが溶出している意欲作である。

以下本書の概要を整理しておく。第I章「序論」では本書の研究課題と視角が展開されている。大前提として、日本の家族が家の永続性を第一義とする家・直系制家族から夫婦を単位とし双方性をとる一代限りの夫婦家族制に変容し、さらに一九八〇年代以降には家族の個人化が進んでいるという日本の家族社会学の成果である家族変動論を下敷きに据えている。そして、永続的祭祀を前提とする先祖祭祀と戦後の家族変動との間には整合性がなく、それが社会的、精神的葛藤・確執の問題を生み出していると捉えている。今一つの前提は今日依然として「家」の枠組みで墓の維持、先祖祭祀が営まれているのは、オグバーンの提起した「文化遅滞説」に依拠してその説明を求めようとしていることである。以上のことから窺えるように、本書は家族の変動の内実を墓・先祖祭祀の変容から照射しようとしたものである。

第II章「直系家族制地域の家族と墓の変化」では、第V章で取り上げられる寺院合祀墓「安穩廟」の存在する新潟県巻町の

調査分析である。直系制家族が維持されてきたが、都市流出、少子化が家の継承を困難にし、家が断絶することを容認する意識も芽生えていることを明らかにしている。そして、地域移動に伴って墓の改葬も少数ながら見られるが、郷里の檀家寺が新たな宗教運動の一環として設けた合祀墓に改葬するものも見られる。そこには「先祖に対する責任感」、「望郷の念」「自分のルーツ」などの意識が窺えることを挙げている。しかし、これをどのように位置付けるかの論及はなされていない。

第III章「人口流出・親子別居地域の墓祭祀の変容」においては、高齢化率が高く、親子別居率も高い鹿児島県大浦町の調査報告である。この地域は地区ごとに一九七〇年前後より共同納骨堂を設けている地域である。高齢者による墓地の維持管理が困難な状況にたいしての解決策である。しかし、転出者のなかには維持管理費の未払いの者も出現するなど流動化がみられるようになってきた。共同納骨堂での祭祀継承が困難になっている状況が浮き彫りにされている。それに対して祭祀の永続的保証を求めて寺院納骨堂への転換がみられることに注目している。

第IV章「家族の変化と墓祭祀の双方化」においては夫婦制家族理念の定着、少子化、さらに個人意識の強まりなどの影響が墓にどのように現出しているかを実証したものである。具体的調査のひとつは都市墓地の墓碑に複数の姓が刻まれている「複数家族墓」の調査事例である。顕著な増加ではないが、夫方、妻方両家の姓を刻んだ墓碑、家の姓ではなく「偲」などの任意の言葉を刻んだものも見られるようになってきている。そうし

書評と紹介

たことから系譜観念が薄らいで、近親者祭祀に比重が移っていることが浮き彫りになっているとまとめている。次いで少子化のなかで「娘だけ」の家族が増え、そうした家族における仏壇、墓の実態、継承意識を探っている。夫方、妻方を先祖とみなす双方化が窺えるとともに、継承が困難な状況に置かれ、様々な模索がなされていることを描き出している。

第V章「家族の個人化と脱家現象」では一九九〇年代以降顕著な動きとなった「非継承墓」を射程に入れた今日的動向を分析したものである。「墓にだれと入りたいか」を基軸にした膨大な意識調査を試みている。その結果「夫婦で一緒に入る」が最も多くあり、それが夫婦家族制理念の浸透の帰結であると結論付けている。さらに夫婦別墓も出現した事例の調査結果も取り上げている。それは夫婦間の葛藤を経験し、女性が夫、家から自立した証として自らの墓を求めた事例を、男性との意識の差として浮き彫りにしている。また、継承を前提としない墓（非継承墓）の建設が一九九〇年代以降顕著になってきた。その実態を新潟県巻町の妙光寺「安穩廟」、岩手県一関市祥雲寺で始められた樹木葬の事例を利用者の実態調査に基づいて分析している。そこで永代にわたる継承を前提にした家墓が家族実態と遊離しており、その選択肢の一つとして選ばれたことが明らかにされた。それに伴う問題として死後の処理問題があることも論じている。

以上各章の概観をしてきたが、あらためて詳細な実態調査に基づいた研究成果であり、先祖祭祀研究の一つの大きな節目となるものであるといえる。分析枠組みも直系家族制に基づく家

から夫婦家族制理念の浸透、さらに家族の個人化が進んで行くという家族社会学の知見を取りこみ、さらに文化遅滞論を導入することによって家族変化と先祖祭祀の変化との間に時期的ずれが生じるということを下敷きにしたものである。分析枠組みは明快である。それであるが故に疑問も出てくる。

敗戦後、特に高度経済成長期以降家に依拠する生活システムは崩壊し、民法の改正とあいまって夫婦家族制理念が浸透していったことは事実である。そして、都市に移住した創設世帯が死を迎える一九八〇年代以降新たに墓を求めて行くが、それが少子化と重なり、墓の継承の課題が大きく浮かびあがった。その選択肢として一人子家族、娘のみの家族などにおいては双家墓の建立を志向せざるをえなくなっている。一方、過疎地帯などにおいては都市移住先へ墓を改葬する方策とか、過疎地帯においては共同納骨堂の建設をもたらした。それは墓での祭祀の継承を求めたが故の選択肢であると捉えられる側面もある。

そこには選択においての葛藤が潜在しているであろう。それを総称して夫婦家族制理念の浸透とか、追慕的祭祀への移行であると単純化できうるかが気になるところである。例えば、夫婦双方の姓を刻んだ墓を、物故者の世代深度が〇か一世代であることから、そのような結論に導いている。しかし、都市移住家族の多くは都市に移住して新たに家族を設けた創設世帯であり、当然物故者の世代深度も浅いであろう。しかし、家の墓、仏壇を継承している相続世帯の場合にはどのような展開をしているのかの峻別も必要であろう。

さらに、双方墓の建立、「非継承墓」であっても祭祀の永続

的保证を希求する志向の根源は何ゆえであるのかを射程に押さえることによって、著者のいう現代日本家族の直面している課題に迫りうるのではないであろうか。「文化遅滞論」は単線的進化論に基づいたもので、多元的発展・変容を捉えきり得るのか気になるところである。

冒頭で述べたように、二一世紀の変動予測を含めた実証研究は一人の作業で完結するものではない。研究の相互交流と蓄積が今こそ求められている。その問題提起の大きな節目となる著書である。著者に敬意を表したい。

Ayako HOSODA

Darstellungen der Parabel vom barmherzigen Samariter

Michael Imhof Verlag, Petersberg, 2002

176 pp. Euro 49.80

出 村 み や 子

本書は、ルカ福音書の「よきサマリア人」の譬えの図像表現の変遷を研究した博士論文として、一九九九年夏にハイデルベルク大学のオリエント学および古代学部に提出されたものに手を加えた形で、昨年ドイツの Michael Imhof Verlag 社より『よきサマリア人の譬えの図像表現』（国際建築史および芸術史研究一三）として刊行された研究である。文中には、著者がドイツに留学中に収集した「よきサマリア人」の譬えをモチーフにした六世紀から一八世紀にかけて成立した貴重な図版六一点が収録され、表紙の裏表にも美しく彩色された中世の写本が配置されているところなど、全体的に中世の聖書写本の雰囲気漂わせる美しい装丁の研究書である。

とりわけ読者の目を引くのが表紙であろう。ここには本書の表題中のサマリア人の冒頭の S の文字に、ロンバルドゥスの『命題集』第四巻の一三世紀の写本のフォリオ 166v の文頭に配された、出だしの装飾文字が効果的に用いられている。本書の一〇四頁の解説によれば、「よきサマリア人」の譬えはロン